

ソウル日本人学校における 「未来志向の日韓関係を創る」国際理解教育の実践例

前ソウル日本人学校 教諭

北海道札幌市立札幌中学校 教諭 井上博文

キーワード：在外教育施設，ソウル，国際理解教育，開院（ケウォン）中学校，李方子（イパンジャ）

1. はじめに

2008年4月より3年間、ソウル日本人学校で教鞭をとる機会をいただいた。中学校の社会科教師として、韓国赴任は望外の喜びであり、挑戦であった。「近くて遠い国」、韓国。もっとも距離的に近い国であり、歴史的にも深い結びつきを持つ両国でありながら、政治的なトラブルを繰り返し、タブーを抱える両国である。

ソウル日本人学校の中学部の総合学習は「未来志向の日韓関係をつくる架け橋に」を目標に各行事などが設定されているが、在任した3年間で生徒そして同僚や関係者の努力と協力をいただき、かつてないほど深まりを見せることができた。

以下は2009年にソウル日本人学校で行った「初代日韓の架け橋」ともいえる李方子皇太子妃を題材にした研究授業とその題材を選んだ経緯、次に2010年にソウル特別市江南区開浦洞にある開院（ケウォン）中学校でのほぼ同じ内容の授業の成果である。そして2011年3月に実現した、李方子妃設立の韓国初の障害児養護施設である慈恵学校とソウル日本人学校の交流行事もあわせて紹介させていただきたい。

2. 授業に至るまで

(1) ソウル日本人学校「3つの中学部校外学習」を経験して

ソウル日本人学校での初年度（2008年）は中2の担任をした。中2の校外学習はあの有名な独立記念館だ。独立記念館は韓国の国の成り立ちを年代を追って再現した博物館だが、ほぼ半分は日帝時代（日本の植民地だった時代）の反日運動についてのものだ。そして光復節（8月15日の終戦記念日）などの国家行事の会場でもある、韓国のいわば反日のメッカともいえる場所だ。

2009年、今度は中1の担任になった。校外学習は「歴史に関わるソウル街めぐり」。他の中学部の先生の協力を得て、メインの見学場所を西大門刑務所歴史館にし、自ら設定したテーマに沿ってソウル市内の歴史的施設を訪問する行事である。西大門刑務所は日帝（植民地）時代多くの政治犯が投獄された場所だ。アジアのジャンヌ・ダルクといわれた、三・一独立運動で有名な柳寛順（ユ・ガンスン）もここで獄死している。

同じ年の5月には修学旅行の下見として、慶州市のナザレ園を訪問する機会を得た。終戦当時、朝鮮人と結婚した日本人女性の何人かは朝鮮に残ることを選択したそうである。しかし解放を迎えた朝鮮で日本人の妻だからといって捨てられたり、妾として迎えられた日本人妻が耐えきれず家を出たり、または1950年に勃発する朝鮮戦争で夫と行き分かれるなどによって、独り身になったままの日本人女性が帰国できないまま取り残された。慶州ナザレ園はそうした日本人妻を援助するために設立されたものである。愛国心とか民族とか、そうした壁を乗り越えた「日韓の架け橋」が現実に存在して見ることができる場所だ。

「何か自分にもできないだろうか」私は子どもたちに伝えていることを、「自ら実践したい、しなければ」と強く感じた。自然と「韓国と日本の架け橋に自らなりたい」と思えてきた。韓国には日本人がそう思える機会や場所がたくさんありすぎるのである。自分が関わるソウル日本人学校中学部の子どもたちに、ここに住んでいるわれわれこそが「架け橋」であり、歴史に関わり、歴史を変えることができるかもしれないのだと強く伝えたいと思うよう

になったのである。

(2) キム・スイム先生との出会い

2年目、校内研究授業の機会があった。中1の総合学習「韓国の福祉施設訪問」の導入授業だった。どのような教材にしようか悩んでいたとき、国際交流ディレクターより貴重なアドバイスをいただいた。「李方子という方が描いた絵が学校にありますよ」ソウル日本人学校職員室前に飾られていた一枚の絵。それは「晩秋」と銘打たれた柿の木の絵だった。作者は李朝最後の皇太子妃であり、なんと日本人であった。そしてさらに耳寄りな情報をいただいた。「李方子妃の右腕だった方がSJC（ソウルジャパンクラブ）で以前講演をされたらしいですよ」。すぐ連絡先を確認し、会っていただけるようお願いした。それがキム・スイム先生だった。御年90歳の方とお話をすることがない。しかしお会いして心配はすべて杞憂に終わった。その先生がよくいわれたのだが、「人を年齢で決めつけるものではない」と。そのよどみない日本語。そしてその情の熱さ。

韓国には「恨」という感情の概念がある。「恨」とは、日本人が思う「うらみ」と同義ではない。「積もり積もった情念とそれを何とか晴らしたいという切なる願い」（野村進『コリアン世界の旅』）である。キム先生の李方子妃にかける思いのすごさ、激しさに圧倒された。それはまさしく「恨」そのものだった。

熱い口調で私に話された。「今、日本、韓国双方の人々が、李方子妃の業績を忘れていて。日本と韓国の歴史の狭間に立たされ、いわば戦争のもっとも犠牲になった方なのに。元皇族にも関わらず、日本の宮内庁をはじめ関係者たちは今何をしているのか。韓国でも、「福祉の母」といわれるほど社会貢献をしたのに、顕彰されていないのはどうしてなのか。彼女が創設したはずの福祉社団法人慈行会、慈恵学校（水原市）の人たちも、方子妃殿下をもっと大切にすべきだ」。初対面、2009年10月26日のことである。

3. 研究授業① 2010. 11. 6 ソウル日本人学校中学部1年生「李方子さんの生き方から学ぶ」より

本時での学習のポイントは「どのような心持ちで1月の社会体験ボランティアに参加したいか」というワークシートの問いかけである。これは李方子さんの福祉に取り組む姿勢を、どれくらい自分の中に取り込むことができたかを表現するものである。

この設問を考える前に授業の中で班単位で自分の思いを発表し、他の生徒の思いを聞く機会を意識的につくった。教師からのアドバイスもあるが、班での話し合いによって生徒は多面的な意見を聞くことができ、課題追求のイメージが高まりやすかったようである。

ここで驚いたのは、8月に校外学習で西大門刑務所を訪れた際に学んだこと（歴史上ぶつかり合った国に幸せに暮らせていることへの感謝・自分たちがこれからの両国間を結ぶ架け橋になる）を盛り込んで、下記のように発展的に回答していた者が9名いたことである。

生徒の回答例

「1, 2時間ぐらい李方子さんの勉強をして、本当にすごいと思いました。私の方子さんまでの気持ちでボランティアできるかは分からないけれど、今まで住まわせてもらった韓国への感謝の気持ちを込めて接することができたらいいと思います。そしてそこへ行って私も方子さんのように何もかも捨ててまでがんばれるものを見つけるきっかけにできたらいいです。」(Y・女子)

「責任感を持って参加し、韓国と日本の架け橋になりたいと思う。そして優しく接して楽しくその時間を過ごしたいと思う」(Y・男子)

「李方子さんが後半生を捧げたたくさんの思い出が詰まった場所だということを心に刻み、韓国の人たちと交流を深めたい。軽い気持ちで接するのではなく、自分たちが方子さんの思いをしっかり受け止めて、韓国と日本の小さな架け橋になるよう頑張りたい。」(H・男子)

ほかにも「強い気持ちを持って参加したい」や「自分も楽しみながら笑顔で接したい」という前向きな回答が、実に全員にあった。職員室前に飾ってある一枚の絵画からこのように豊かな感情の広がりを持つことにまで至った生徒の姿を見たことでほぼ研究課題を達成し、教師自身も学ぶことの多かった題材・授業だったと考える。

4. 研究授業② 2011. 9. 4 ソウル市立開院（ケウォン）中学校 1年生「李方子さんの生き方から学ぶ」より

「本時の目標」についての成果と課題だが、まず当日参加した開院中1年生25名（日本人学校2年生5名含む）の生徒全員が、下記のように、

・李方子皇太子妃の福祉分野での業績を知り、後半生のほとんどを福祉に向かわせたきっかけが何だったかを考える中で、「ボランティア活動」の大切さを実感する。

（前出2名以外の、アンケートの質問①「授業の感想と李方子皇太子妃についての感想」についての記述）

→「李方子さんの人生は本当に尊敬し、自分もそのようにしたい。あんなに苦勞をしながら希望を失わず、生きていた姿は本当に素晴らしいと思う。」（J・Y）

→「李方子さんという人を授業に参加しながら初めて分かるようになり、どのようなことをした人か分かって良かったと思う。」（K・S）（筆者注釈：ちなみに李方子妃殿下については「国史」の授業に登場する人物である。）

授業について肯定的な意見を持っていた。特に下のアンケートの回答についての考察で大変興味深かったのは、われわれ日本人が考えるよりも、授業前の日本に対する印象が一般的な中学生でもとても悪かったことである。しかしそれが今回のような日本についての学習を、日本人の同年代の生徒とともに意見交換などを織り交ぜながら行うことで、驚くほど日本に対する印象が変わったことである。他の生徒の記述もほぼ同様であった。ここに書かれたことから、日韓双方の学校での新たな可能性を見いだすことができるだろう。

「おわりに」にもあるが、日韓の歴史認識に関わる部分にふれることはお互いタブーとされた分野であるため、今までソウル日本人学校、そして交流先の学校ともに踏み込めなかった領域だったといえる。もちろん国際問題に発展しかねない分野だけに、この上ない慎重さが必要なのはいうまでもないが、お互いの国の教師たちの熱意と信頼でここまでできるという可能性を見いだすことが出来たのは大きな成果と感じた。



開院中学校での公開研究授業の風景

・方子皇太子妃の生き方を自分にフィードバックし、どのようなボランティアをすることがより「日韓の架け橋」になりうるか、真剣に考えることができる。

(同じく、アンケートの質問②「今回の授業の前後で、相手国の印象について変わったこと」についての記述)

→「私は日本が嫌いだったし、大韓民国の敵だと思っていた。しかし、この授業がきっかけで日本と韓国と一緒に発展していけばいいなと思った。」(J・Y)

→「はじめは自分と違うかなと思い不安だったが、とても楽しかったし、1つの思い出ができて良かった。そしてこれからは日本を悪く思わず、日本人について悪い思いを持っている友人がいたら、日本人はいい人たちだというつもりだ。」
(K・S)

→「全部日本が悪いことばかりではなく(むかしのことでわたしも日本によくない思いがたくさんあったが)、授業を通して日本人の中にも韓国が好きな人がいることが分かった。これから日本人と会うときは、授業であった友達を思い浮かべながら挨拶をしようと思う。」(K・D)

5. 総合学習 2011. 2. 8「水原(スウォン)市慈恵学校(李方子妃設立養護施設)訪問」より

さらに前出キム・スイム先生の強い思いを受け、ついに離任直前の2011年2月、韓国初の知的障害児施設である慈恵学校への訪問交流が実現した。成功に終わったのはいうまでもない。今年度は慈恵学校の子どもたちがソウル日本人学校を訪問してくれるそうである。また慈恵学校キム・ウ校長より、職員同士の交流も提案され、現在計画中である。

日程・内容

10:30 水原市慈恵学校(자혜학교)到着

11:00 日本人学校による発表(多目的ホールにて)

1 開会式 2 和太鼓・篠笛演奏 3 合唱(3曲) 4 よさこいアリラン演舞

11:45 学校見学(李方子妃記念館含む)

12:30 昼食(一緒に給食を食べる)

13:30 慈恵学校の授業へ参加(グループ別に各学級へ)

※持参したお菓子(クッキーなど)もこの時間帯に

14:20 全体写真撮影、お別れの言葉

6. おわりに

民間での交流がこれだけ盛んになった今日、いよいよわれわれが取り組まなくてはならない課題は、過去の歴史問題を政治レベルではなく教育の中で「どのように」双方の国の子どもたちに伝えるかを考え、そしてその子どもたち同士が今回のように触れあい、お互いの歴史を語る機会を創り上げていくかなのであろう。そして子どもたちが自ら出す結論が、自分たちが「未来志向の日韓関係」(イ・ミョンバク大統領)をつくる担い手なのだ、という自覚を持ったとき本当の意味での新しい両国の歴史が始まるのではないだろうか。

このような取り組みがソウル日本人学校だけではなく、韓国の小中学校と恒常的に行うことが出来たときこそ、海外における「理想的な日本人学校像」に近づいていけると確信することができた3年間であった。



慈恵学校の生徒と写真撮影